



チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学  
教育学部  
日本語教育学科

# 日本語-トルコ語-日本語 テキスト校正手引き & 学問的誠実性に基づく人工知能（AI）使用ガイドライン

2023年、チャナッカレ

本稿は、以下の目的で作成された。

ア) チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学教育学部日本語教育学科（以下、日本語教育学科）の学生からの校正依頼に対応すること。また、教員が一定の倫理的及び教育的枠組みの中で校正行動を実施する際の指針を示すこと。

イ) 教育・学術生産活動（課題、レポート、プレゼンテーション等）を行う際に学問的誠実性の原則内で人工知能（AI）を使用するためのガイドラインを提示すること。

本稿は初版であり、継続的に改善を重ね発展させていくことを目指す。本稿における全ての表現は助言にとどまるものであり、必要に応じて関連する法律や規則、条例などが拘束力を持つ。

この文書内の「テキスト校正」とは、英語の文献での proofreading の概念に相当するものであり、「文書の文法エラーを修正し、テキストを読みやすくするために記述文を確認する作業」（Tauginiene vd., 2018）を指す。テキスト校正手引きの作成に当たっては、Coventry University Group Proof-reading Guidance 2.0 ver.（2020年11月11日）および University of York Guidance on Proofreading and Editing 内の文書を参考にした。

なお、人工知能（AI）利用ガイドラインの作成に当たっては、European Network for Academic Integrity (ENAI) のテクノロジー&学問的誠実性ワーキンググループのメンバーにより執筆された ENAI Recommendations on the ethical use of Artificial Intelligence in Education (Foltýnek vd., 2023) を参考にした。



*Japonca-Türkçe-Japonca Metin Düzeltme Kılavuzu & Yapay Zekanın Akademik Etik Çerçevesinde Kullanımına İlişkin*

*Tavsiye Metni* © 2023 by Dr. Tolga Özşen is licensed under CC BY-NC 4.0

# テキスト校正手続き

大学生活において学生が外国語で作成されたテキストを母語話者にチェックしてもらうのはごく一般的なことである。これを英語で proof-read と言い、そのチェックを実施する人を「校正者」(proof-reader)と呼ぶ。学生が自分で作成したテキストを効率的に、よりクオリティーの高いものにしたいと考えることは理解できる。しかし、その「チェック行為」は一定の法的及び倫理的基準と枠組みの範囲内で行われるべきである。テキスト校正プロセスにおいて重要なのは、テキストのオリジナリティが維持され、学生が作成した内容が変更されないようにすることである。校正者は誤りや不備を指摘する責任はあるが、校正並びに編集作業はこれらの指摘を基に学生自身が行わなければならない。テキスト校正における校正者の基本的な役割は「誤りや不備を指摘すること」であり、学生は「指摘された誤りや不備を自分の力で修正し、テキストを改善すること」を意識すべきである。

## テキスト校正における教員の役割の定義

- a) 教育カリキュラム内の関連活動（課題、試験、レポートなど）
- b) 事前に定められた課外活動（スピーチコンテストの原稿、エッセイコンテストなど）
- c) 学科代表として参加するイベント用のテキスト（プレゼンテーション、スピーチ、紹介文など）
- d) 上記に該当しないテキスト（日本の奨学金の申請書、CV など）は、学生の要望を受け学科（関連する教員）の最終的な承認が得られた場合にのみ受け付けられる。

## 概念定義

- 2.1. 校正者と評価者の違い: 校正者はテキストを読みやすくする者で、評価者はそのテキストの学術的な質と量を既存の基準に基づいて評価する者である。
- 2.2. 校正 (proof-reading) と編集(editing)の違い: 校正を行う者は、単に誤りを指摘する責任しかなく、修正すべきではない。「校正」(proof-reading) と「編集」(editing) は異なる概念であり、校正者は直接的な修正を行わず、適切な文法などの使用を指示できる。

## テキスト校正で受け入れられる倫理的枠組み:

- a) 単語や漢字の使用に関する間違いを指摘できる。
- b) 句読点、入力ミス、書き間違い、漢字の入力ミス、略語、引用、番号付け、参考文献、表、図、脚注、および付録の形式的な修正ができる。
- c) 文法の誤り、意味のズレ、校正に関する問題を指摘できる。しかし、直接修正を行わず、適切な表現を使用するように指導する。

- d) 学術的記述（論文、レポートなど）の原則と技法（テキスト内の引用など）の一貫性、欠如、および誤りを指摘できる。学生に必要な情報を提供することも可能である。
- e) 学術的記述（論文、レポートなど）に使用される表、グラフ、画像などの資料の誤りを指摘できる。正しい使用法に関する情報をデジタルまたは紙媒体で学生に提供することも可能である。

### **テキスト校正における倫理的枠組みの違反につながる可能性のある行為:**

校正者は、

- a) 文や段落、またはテキストの一部を再度書き直してはならない。
- b) 校正や流れに関する問題を解決する具体的な解決策を提案してはならない。
- c) 学生に相談することなく新しい単語や漢字、表現を追加してはならない。
- ç) テキストに新しい主張、文献、ソース、データなどを追加してはならない。
- d) テキストに記載されているデータや定義に変更を加えてはならない。
- e) 校正者独自の意見を追加してはならない。
- f) 主題の主旨や流れを変更するような追加、削除、言い換えをしてはならない。

### **その他の注意事項**

- a) 校正サービスを外部に委託する場合、学生は提出テキストの最終版に校正者情報を明確に記述する必要がある。なお、委託先が企業の場合（特定の料金がかかる場合）、組織情報も詳細に記載し、証拠用の資料を（必要に応じて提示できるように）用意しておかなければならない。
- b) 学生は、校正者が本ガイドラインにて記述されている枠組み内で作業していることを確認する必要がある。ここで強調されている枠組みを逸脱していることが確認された場合、それは「契約不正行為」あるいは「論文代行」(contract cheating)として位置付けられる可能性がある。確信がない場合には、学生は教員に違反行為を避ける方法について相談すべきである。
- c) テキスト校正は、テキストを読みやすくし、クオリティを向上させるための作業であり、高得点を取ることは直接関係がない。

## **2.5. レポート提出プロセスにおける注意事項**

レポート、宿題などのタスクにおいてテキスト校正が行われた場合、最終版の提出時には下記の手順を踏む必要がある。

ステップ1：学生がテキストを作成する。（初版）

ステップ2：テキスト校正プロセスにかけ、校正が行われたファイルを保存する。（校正バージョン）

ステップ3：校正中に指摘された点を修正したり、書き換えたりしてテキストの最終版を作成する。（改訂版）

ステップ4：改訂版を提出する。

したがって、提出するファイルには、1)初版、2)校正版、3) 最終的な修正・編集後に学生が評価のために提出した改訂版、を含める必要がある。これにより、教員は提出されたものの校正プロセス（初版 - 校正版 -改訂版）を確認し、その上で評価を行うことができる。

## 学問的誠実性に基づく日本語学習における人工知能 (AI) 使用ガイドライン

人工知能 (AI) をベースとしたアプリケーションは、その情報源や利用プロセス、意図、手法、承認が明確に示される場合に、教育活動や学術プロセスで受諾可能と見なされる。この文脈において、学生が教育および学術活動で以下の原則に基づき分別を持って AI を使用することは非常に重要である。適切な通知、告知、指導、または許可なしに教育および学術生産活動（宿題、レポート、エッセイ、プレゼンテーションなど）で AI を使用することは、学術不正行為または疑わしい行為として位置づけられる可能性もある。宿題などにおいて AI を使用する際には、注意深く教員と連絡を取りながら確実なアプローチを取るべきである。

教育・学術生産活動（宿題、作文、発表、レポートなど）において、学生は担当教員の指導に従って AI ツールを利用するべきである。

これらの活動の生産プロセスにおいて：

- a) 教員との相談が第一歩となる。
- b) 教員と相談後、形式的なサポートを提供するソース/ツールのみを使用するよう注意する必要がある。（修正ツール、スペルチェッカーなど）

AI ツールは学生が自ら設定した範囲内で内容を作成するものであり、AI ツールそのものが共同著者となることはない。よって、不正行為が発生し、確認された場合の全ての責任は学生に帰属する。著者に関する注意事項については COPE Guidelines for Authorship and AI を確認すること。

AI が提供する情報、参考文献、データ、リソースなどが必ずしも正確であるとは限らない。提出するもの（課題、レポート、エッセイ、プレゼンテーションなど）に関するすべての法的および倫理的責任は学生に帰属する。

AI ツールによる校正の場合

- a) AI にかけられたテキストのオリジナルバージョン（初版）
- b) AI にかけられたプロンプト（プロンプト）
- c) AI がプロンプトに基づいて作成したファイル（校正版）を、改訂版/最終版/提出版の追加ファイルとして提出するべきである。ステップ B および C の証拠も追加ファイルに（スクリーンショットまたはスクリーンレコーディングとして）入れるべきである。

AI ツールは確実な信頼性のある情報源ではない。学生は教員に指示された信頼性のある情報源を使用するべきである。

AI ツールは元来、言語モデルである。テキスト生成においては効果的であるように見えるものの、日本語においては完璧であるとはまだ言えない。学生はこれらの現実を考慮したうえで AI ツールを使用すべきである。

なお、AI ツールはテキストの作成において偽造、改竄、盗用（fabrication, falsification, and plagiarism - FFP）などの不正行為を起こす可能性が十分にある。学生は課題などの執筆の際にこれらの不正行為に注意することが期待される。

まとめると、学生は学術不正の申し立てを避けるために、AI ツールをサポート要素として、倫理的な枠組み内で使用するべきである。